



復刊第142号
題字 吉岡 弥生

巻頭言

副会長 中濱 昌子

1月17日予期せぬ阪神大震災が起
こりました。被災なさいました先生
方に心よりお見舞い申し上げますと
ともに、一日も早い復興をお祈り申
しあげます。

日本女医学会といたしましては、佐
藤会長の俊敏な判断・実践力によ
りまして左記の通り行いました。

○被災地へ見舞金
1月25日、被災地へのお見舞金と
してひとまず百万円を読売新聞社へ
お届けいたしました。

○被災者の救護

第一次 2月10・11・12日山崎名
誉会長、佐藤会長はじめ四名の会
員が各避難所を廻り、疾病・外傷の
治療、精神的サポートを実施、心の
拠り所を失った被災者たちのよき相
談相手になり、大きな心の温もりを
与えられました。特に、老眼鏡を持
ち出せなかつた老人たちに岐阜の半

田先生の持参なさつた老眼鏡(検眼
後)は大変喜ばれたそうです。ご多
忙の中ご出勤くださいました先生方
ご苦労様ございました。

第二次 主に眼科・耳鼻科の先生
が近く出向かれる予定です。

○義援金

会員の先生方多数のご協力により
まして目標額近く集まりました。詳
細は後刻会長よりご報告があると存
じます。先生方の心のこもつたご協
力有難う存じます。

* * *

昨今医師、特に開業医は患者の診
療だけでなく広く福祉・環境に目を
向けねばならなくなつております。
喘息などアレルギー疾患に対して
は食餌療法・家庭環境について今迄
も指導しております。アレルギーと
してもっとも多いハウスダスト、ダ
ニ、ペットの毛など。特にダニはサ

ツシで密閉、床の絨毯、暖房と人間
に快適な生活はダニにとつても好都
合な生息場所なので、お部屋の換気
掃除などやかましくいつております。
最近皮膚掻痒を訴える人が増え
ています。冬場は皮膚も乾燥し易い
のでもちろん増えるのですが、私は
洗濯機へ入れる洗剤について尋ねま
す。ふりかけているか、完全に溶か
してから入れているかです。案外ふ
りかけている人がいるのです。ふり
かけでは完全に溶けきらない洗剤が
肌着の繊維の間に残り、これが原因
になつている場合も考えられます。

私が園医をしている保育園でアト
ピー性皮膚炎の児が多く、一軒の保
育園では栄養士さんが協力的で、献
立を立て直し、実行したところ、半
年後の健診では驚くほどアトピーの
児が少なくなつていました。他の保
育園は既成の献立を続けていたので、
やはりアトピーの児は減つていませ
んでした。

地球環境に目を向けてみましょう。
最近は何万もの化学物質が製造販売
され、生産消費が増えています。お
金さえ出せば何でも買える時代、そ
して家が狭いのでどんどん捨てる時
代です。ここで産業廃棄物が問題に
なります。半世紀も前に、私が女学
生時代の物理の先生が、「昔、恐竜
時代は弱肉強食でそれが進んで自滅
してしまつた。人間は頭脳が進み生
活に便利な文明の利器がたくさん出
てくるでしょうが、頭デッカチにな
つて自滅に繋がらなければいいです

もくじ

巻頭言..... 中濱 昌子 (1)

〈第8回ワークショップ・女医の未来像〉

- 第8回ワークショップを終えて..... 橋本 葉子 (2)
- 開業医の立場から..... 佐藤千代子 (2)
- 大学勤務の臨床医学者の立場から..... 大澤真木子 (3)
- 大学勤務の基礎医学者の立場から..... 藤巻わかえ (4)
- 女医と国際協力..... 岩尾 昌子 (5)
- 行政の立場から..... 加藤 竺子 (5)
- 政治・行政の立場から..... 松井ひろみ (6)

〈阪神大震災 女医会、渾身の医療支援〉

- 阪神大震災被災地の巡回診療..... 佐藤千代子 (6)
- 被災地巡回診療に参加して..... 山崎 倫子 (7)
- 阪神大震災救援活動..... 白浜 光子 (8)
- 神戸での経験..... 半田喜久美 (8)
- 神戸救護班に参加して..... 稲生 襄 (9)
- 眼科の立場から..... 橋川ふさ子 (10)
- 「また来て下さいね」..... 松井ひろみ (11)
- ボランティア活動に参加して..... 川田喜代子 (11)
- 貴重な体験、大きな役割..... 加藤 竺子 (12)
- 医療支援に参加して..... 永谷 裕子 (13)
- 「早く自分たちの手で」..... 坂本 雅子 (13)
- 女医会救護班に参加して..... 畑山喜美枝 (14)
- 第二次救援活動に参加して..... 橋川ふさ子 (14)
- 〈短歌〉阪神大震災..... 中濱 昌子 (13)
- 高崎市で公開講演会..... 丸茂 晶子 (15)
- 平成5年度日本女医会会員学位取得者一覽表..... (15)
- 第40回定時総会のご案内..... (2)
- 理事会議事録..... (16)
- 会員動静..... (16)
- 編集後記..... (16)

第8回ワークショップ 女医の未来像

第8回ワークショップを終えて

常任理事 橋本 葉子

日本女医学会学術部主催の第8回ワークショップは「女医の未来像」というテーマで、平成7年1月28日(土)午後3時から、京王プラザホテルの42階「高尾」で盛大に行われました。出席者は一五五名、その内学生一六名(東女医大、北里大、信州大、名大、大分医大)という今までにない大人数の参加をいただきました。今回は女医と医学生との討論を主体にするという事で、各医学関係に特に宣伝をいたしましたので、大分医大という遠方からもご参加いただけました。現実には、会場の関係で医学生との討論は懇親会会場で行わざるを得ませんでした。学生は女医学会の存在および女医の活躍の場の多様性を認識してくれたものと考えております。

開業医の立場から



会長 佐藤 千代子

一九八〇年の厚生省研究班の調査によれば、医療機関を選択する時の情報源は「家族がかかっている」が26%と最も多かった。家族がかかっているという事は、かかりつけ医を持っているということであり、長年開業している医師は、ほとんどが家族の三世代、四世代を診ていることが多い。患者の背景にある家族の歴史、体質情報、生活環境等を熟知している中で、医療を通じて生ずる

親近感、医師に対する信頼感こそは開業医にとって何よりの喜びであるとともに、責任の重さを深く意識するものである。現在、医療に求められているものは、インフォームドコンセントを始めとして医師と患者の対等の人間関係である。医師自身には患者に対し優位の認識が無くても、客観的にはなお医師と患者の関係は常にタテの位置であり、ヨコの関係とは認められない。フリーランドの扶杖医戒の冒頭に「病メル者ヲ見テコレヲ救ハムト慾スル情意、是即医術ノ由テ起ル所ナリ、今モ仍ホ医宜ク此心ヲ以テ本トスベシ。冀クハ医術純正貴重ニシテ、而シテ施ス者モ受クル者モコレニヨリテ真福ヲ得ムコトヲ」この言葉こそ医の真理であり原点であろう。

今後、日本の医療制度は大幅に変革してゆくと思察される。病診連携のシステム確立の上に機能分化が推進されることは医療効率の面からも不可欠と考える。開業医としては自分の守備範囲の責任を完うすると共に、患者の最高の治療のために守備範囲を超えた展開を図らねばならない。

「女性医師の増加が日本の医療を変えよう」という論文を読んだ。日々の診療の中で女医は本人や家族から直接の訴えが無い症状を女性の感性から敏感にキャッチすることが多い。また、妊娠、出産、子育てなどに、同じ悩み、苦しみ、子育ての不安、苦勞、喜びを経験した女性同士の気易さで指導できることもヨコの関係を増幅するものであろう。

がね」と愛でていらした言葉を思い出します。神奈川県環境科学センターのお話によりますと、かつては日本は水が豊富で飲み水には不自由しないといわれていたが、現在この水質が深刻な問題だそう。二年前程前に新聞で水道水汚染と報じられたこともありました。

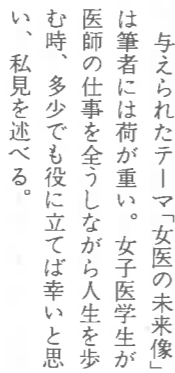
また、昔のゴミは容易に自然に還元しましたが、最近の廃棄物には化学物質が多く自然に還元し難いのだそうです。最近のゴミには食塩が多く焼却灰の中に大体二〜三%の塩素が含まれていて、塩素イオンがあるといういろいろな形で焼却しても発癌性の強大なダイオキシンが出てきます。昔は食べ物の滓とか尿は自然界の微生物が分解できる物質でした。この微生物は土中ですが現在はコンクリートでほとんど土がないこと、また自然浄化をする緑が都市にはほとんどないことも問題で、人工的浄化施設が必要になってきます。

廃棄物の処分場としては、廃棄物により安定型・管理型・遮断型に分かれていて、現在、現在の処分場は三年から五、六年で一杯になること、深刻な問題だそう。もし汚染が海へ流れ込めば生物濃縮で魚等に蓄積、廻り廻って人間にということになります。本当に恐ろしいことです。これからもっと本格的に環境について勉強して疾病の予防治療に当たらねばと痛感しております。

大学勤務の臨床医学者の立場から

東京女子医科大学小児科

大澤 真木子



与えられたテーマ「女医の未来像」は筆者には荷が重い。女子医学生が医師の仕事をするに際しては人生を歩む時、多少でも役に立てば幸いと、私見を述べる。

第一に、「男と女は同じか」というと、人間としては同じであるが、生物学的には異なる。XとYには相同部分があるが、性染色体が異なる。また女性のミトコンドリアは子に伝わるが、男性のそれは伝わらない。その意味では、子の資質により影響を与えているのは、女性である。すなわち男女は互いに遺伝子が異なり、その結果、生殖における役割、筋肉量などが異なっている。男女の脳の機能の違いについての研究もある。日常生活で感じている通り、男児は幼少時手がかる。一般に男児の方がより好奇心が強く積極性があり、結果としていたずら好きで落ち着かない。が、その過程で得た学習は男性のダイナミックさ、アイディアの豊かさに繋がる。

求められる能力は、男女同じである。しかし、医師にはおのおの個性があり、男性医師にも、女性医師にも種々特徴のある医師がいる。個人の得意、不得意、選択分野のちがいによって各人の発揮すべき能力がちがう。個人の幼少時からの生育歴によっても、行動パターンが異なる。個性は認められるべきであり、男性医師との協力体制下で医療をより良くする方向で携わるためには、女性としての個性をプラスに生かす必要がある。すなわち感性の鋭さ、優しさ、思いやりなど母性に通じるものが活かされるべきである。

女医の一生を考えると、卒業後結婚し子を育てるという道を進むならば、妊娠、出産、育児に関わることになる。家事一般も一生役割分担としてあり、また一般には六十歳ころには、老父母のケアが要求され、家の中では女性の負担の方が重い。そこで、女医が家庭と仕事を両立する場合、女性であるための家庭内の負担をいかに軽減し、医師として伸び

ていくかが課題となる。一方、負担部分を他者によって代行することである。なぜ女医が母ともなると仕事を離れ、家庭に入り込んでしまうかという点、他者による代行よりも自分が携わる方が、より良く達成できるという意識が働くからである(確かにそうなのだが……)。女性の役割の中で一番重視されるべきは育児である。育児は負担でもあるが同時に女性自身が成長するための自己教育の場でもある。子を仕事の犠牲にせず、育児をするにはどのような代行法があるであろうか。乳幼児期は家庭看護婦、祖母の助け、看護学校・保育学校生徒のアルバイト、保育園にあずけるなどの方法がある。

学齢に達したら、家庭教師の力を借りてもよい。休みは、各種キャンプを利用したり(集団の中で育つ協調性も貴重)、あるいは田舎の祖父・親戚宅を訪問することも可能である(重要なことは、愛情をもって子に接してくれる人を探すこと、いかなれば育児の代行者にも真の職業意識—自己の能力を他人のために役立てようとする意識—をもった人を探ることが重要である。現実には日本ではこれが困難であり、この点日本女性性すべての意識が変革されれば仕事の下に手抜きを工夫し、また祖母の協力を得る。子が一定年齢に達したら、積極的に手伝いをさせて

勤勞の尊さへの実感や、家族と共に何かをやり遂げたという共感を育てる。経済的に許せば、家政婦なども依頼する。老父母のケアが必要な場合には、家政婦、ボランティアへの依頼もある。

また、時間の合理的配分も重要である。子育ての時期には、乳幼児とともに眠り(寝かしつけてから仕事をしようなど)と思うと子は決して眠りについてくれない。夜中、明け方に仕事をしなす。オーティオビジュアルの活用。家事をしなす。各種教育的テープなどを聞いたり見たりしながら、家族もお勧めである。フアクシミリを使えば移動せずにことをすませることが可能で、論文校閲などには応用できる。ワープロ、コンピュータ、電子手帳などを利用し、むだな労力は省く。

一方、時間的余裕があるときは、できるだけ仕事をかかって出た他の医師の役に立ち、また研鑽を重ねるよう心掛けることが重要である(そうすれば、自分が困ったときにも助けを求められる)。

大学勤務臨床医として要求されることを再考すると、大病院の使命は、臨床医学では、診療・教育・研究であり、臨床医には患者さんの持つ問題点を把握するための広い視野、鋭い感性、次に問題解決のための知識と知識の応用力、また、コ・メディカルスタッフと協力してこれらを実践する姿勢・態度、技能が求められる。すなわち相手の気持ち

を和らげ、問題点を浮き彫りにし、理解し、説得力を持って対応し問題解決できることが必要である。これを踏まえて、女医として働き続けるために重要なことを考えると、根底にやる気とプロ意識を持つことはいくらでもないが、さらに本人とその家族)には以下のことが要求される。体力、精神力(忍耐力、やる気、集中力)、実践力(技術、努力)続けることのできる自己統制力、知力(知識、客観的分析力、評価力、理論性、応用力、独創的アイディア)、人徳(鋭い感性、包容力、思いやり)である。特に最終項は女性としての役割分担を通じ、磨くことが可能であろう。

女医がその力を発揮するための本人としての解決策を結論付けると、一番良いのは結婚しないことである。そうすれば医師としての能力を思う存分発揮できる(この道を歩まれ、傑出した先輩が多数おられる)。第二は結婚しても子を授からないこと。夫婦でともに高め合うことである。第三として結婚して妊娠、出産、育児を経験した場合(私はそうであったが)、その経験を有効利用するには、小児科医になる(知識・技術の点でも還元可能)、あるいは温かく学生を育てることのできる教育者になるしかない!?

一方、体制としては、保育園の整備、時間交代制の確立などが必要であろう。いずれにせよ、自己の意思、努力と家族の理解がもっとも重要な

ことはいうまでもない。最後に将来多くの医学生が小児科

大学勤務の基礎医学者の立場から

東京女子医科大学微生物学教室

藤巻 わかえ



女医はふえたものの、女医でかつ基礎医学研究者というのは明かに少数派であるので、いろいろと考えるべき問題があるように思います。つまり、医師が研究をすることの意義、また研究者が女性であることの意義、さらには女性にとって研究者であることの意義といったさまざまな次元の問題が提起されます。

アメリカでは女性の地位向上が日本より進んでいますが、それでも女性研究者は少数派です。アメリカ在住当時、アメリカ癌学会総会で赤ちゃん連れの研究者の姿があり、育児中も違和感なく社会参加している様子に驚きました。しかし実際にアメリカ癌学会にどれくらい女性の会員がいるかを抽出調査しましたら、正会員では医師のうち15・4%、医師以外では15・6%、準会員では医師のうち25%、医師以外では40%という結果で、大多数は男性、とくに正会員医師に占める女性の割合は最低でした。比較的若い年齢層からなる準会員では女性の比率が高くなっていますが、将来女性の研究者が増える

医の道を歩むことを望んで止まない。

とほしく大局的なもの見方ができないといわれます。しかしながら、女性ならではの細かな心配りなどは、現代の進歩した方法論のなかで大切に生かされます。正確なデータがあつてこそ研究を前にすすませる大胆な推論も可能なわけですから、その意味で、女性こそ基礎医学をやるべきだともいえるかもしれません。

さて、社会的な側面を考えると、女性が研究をすることの現実的問題が山積みされています。一番研究が進む年代に女性は結婚、出産という問題に直面することが少なくありません。その場合に仕事と家庭の両立に悩むこととなります。配偶者の協力がえられたとしても、お互いに働いていけば時間的制約をうけざるをえません。そういった場合、研究職ですと急変や急変などの心配はなく、自分で仕事のペースを決定できるのは大きなメリットですが、パートタイムでは研究はむずかしいので家庭の制約が大きい場合は不可能です。また研究者の給与は一般にドクターより低く、保育費用などを考えると現実的にはなかなか容易なことではありません。さらに妊娠中など放射性同位元素を使う機会の多いことも不利であります。もっとも最近では放射性同位元素を使わない実験方法も大分開発されてきました。なお、研究者は業績で評価されますので、男女の差別は比較的すくないのではないかと考えられます。

したが、社会的にも女性の研究者が大切であるということが、すこしずつ認識されてきたようです。昨年の日本学術会議では、「女性科学研究者の環境改善の緊急性についての提言」という声明が出されました。その序文では、科学技術の発展が人類の将来に大きく影響する現代において、女性が、研究を行うことは当然であるのに、女性研究者の地位はまだ低く、しかも地位向上の重要性が十分に政府、行政当局に認識されていないとはいえないことに言及しています。そして具体策として、たとえば、休学・復学等の制度の見直し、保育・介護サービスの充実をうたっておりますが、これはあまりにも当然のことであるのに、現状はあまり

にも不十分です。旧姓の継続使用についても、昨年来新聞紙上でも随分議論となったところで、私自身は研究が好きで、また女性医師である自分が研究をすることに少くもなるとも医学の進歩に貢献できるのでは、とおおきな夢をもってありますが、女子医大という女性にとっては恵まれた環境にあつて、よい師にも恵まれましたことは幸運でした。世の中一般ではどうでしょうか？ 現在は内山教授のご指導のもとスーパー抗原の研究をさせていただいてありますが、三人の子どもたちにも誇れるような、一生懸命の生き方をしていきたいと考えています。

第40回日本女医学会定時総会のご案内

いよいよ、総会まであと一カ月となりました。先生方にはますますお元気で活躍のこととお慶び申し上げます。すでにお申し込みいただいておりますが、第40回日本女医学会定時総会を大宮市において、左記の日程のように開催いたします。なにとぞ、皆さまお誘い合わせのうえ、奮ってご参加くださいますよう、埼玉女医学会会員一同、心よりお待ちしております。

開催日 平成七年五月二十七日(土曜日)
開場日 平成七年五月二十八日(日曜日)
会場 (一) 大宮ソニックシティ
埼玉県大宮市桜木町一七五
TEL 〇四八―六四七―四一一
FAX 〇四八―六四七―四一五九
財団法人 産業文化センター

女医と国際協力



秋田県寿光会福永病院
岩尾 昌子

日本の結核対策は世界に類を見ない効果をあげている。保健所勤務医にとって、このノウハウがいまだ結核に悩む国々に役立つか、非常に興味深いものであった。

私は国際事業団の専門家として、昭和63年から二年間、ネパール王国保健省に出向し、結核対策プロジェクトに参加した。チームは結核専門医、看護婦、事務、私(公衆衛生)で、後から臨床検査技師、放射線技師、保健婦が入れ代わって加わった。仕事の内容は、日本からの援助で建設中の国立結核センターの活用やネパールの実情にあった結核対策システム作り、カウンターパートへの指導であった。

つきあう範囲は保健大臣や政府の高官からヘルスポストの職員まで多彩である。私は両国間の交渉や意見調整も担当し、上層部との会議は大変神経を使う仕事であった。時として、男性間の公的な話し合いは、テーマやメンツが優先し、あわやの言い合いに発展する。女性的場合、メンツにこだわるより実務的なホンネがいろいろと出る傾向にあった。月一回一週間に、海拔二千メー

トルの山奥や気温三十七度をこす亜熱帯地域のヘルスポストに出かけ、職員教育をした。山間は徒歩なので体力との挑戦であり、飲料水の確保、宿泊場所などは、サブバイバルキャンプのような出張となった。二年間の任務を全うするには、常に体調を良好にする努力が必要であった。

行政の立場から



福岡市助役
加藤 竺子

政治行政の立場からというテーマを頂きましたが、広範な分野にわたるので、与えられた一分ではとても意をつくせないうと思うが、自分の経験を通して感じたことを少しお話ししたいと思います。

日本社会では、政治・行政に携わる医師、特に女性は、諸外国と比べると少なく、国会議員七六〇人中、医師

幸いネパールでは当時保健大臣が女性であり、八〇〇名の登録医のうち、一〇〇名が女医であった。西南アジアの国々は、お産や女性の生理に関する事象は男性が立ち入れないようだ。看護婦による地域の産婆さんたちへの産科講習会は、私のみが見学を許されたことがある。アラブ諸国では女性は男性の医師に診察して貰えない所もあるという。女医としてわれわれが入る分野はまだ多く、今後の後輩の先生方の進出を大いに期待したい。

三人の子持である私が、我を通して二年間外国に単身赴任できたのは、家族の協力や励ましと、先輩の女医としての母の強力な支援のお陰である。この貴重な経験の影響は大きく、機会を得たことに感謝している。

・歯科医師の免許を持つ一人三人、また、女性の議員は五人(7%)女性の社会進出では世界一〇位といわれる。

私自身が女性でしかもドクターで指定都市(人口一〇〇万以上の大都市)の助役をしていることはかなり稀な存在で、現に平成3年に就任以来未だに全国一人という状況である。

日程

- 五月二十七日(土曜日)行事
 - (一) 受付 九時三十分～十二時
 - 評議員会 十時三十分～十二時
 - 昼食 十二時～十二時四十分
 - 総会 十三時～十五時
 - 休憩 十五時～十五時二十分
 - 記念講演 十五時二十分～十七時
 - 演題 間質性肺炎の臨床
 - 講師 済生会栗橋病院 滝沢敬夫先生
 - (二) 懇親会 会場 パレスホテル大宮(十八時～二十時)
 - アトラクション 一、ハーブ、フルート
 - 二、マリンバ、ピアノ
 - 三、ソプラノ(カンツォーネ)、ピアノ
 - 吉沢恵理・宮本聡子
 - 李奉姫・呉恵珠
- 五月二十八日(日曜日)
 - 観光Aコース(一泊) 復路直帰コース
 - 長瀬秩父ライン下り(川越小江戸散策、小川町埼玉伝統工芸館にて手すき和紙製作過程見学)
 - 宿泊II長生館(Tel 〇四九四一六六一―一一三)
 - 埼玉県支部主催歓迎会 郷土芸能 祭音頭
 - 家元 金子病院院長 金子千侍先生 社中
 - 五月二十九日(月曜日)
 - 観光Bコース(日がえり) 復路巡礼コース
 - 会場への交通 JR大宮駅西口より徒歩約5分

日本女医学会埼玉支部総会準備委員会

医師が行政の中でその専門性を十分に発揮するためには、一般行政事務も把握し、ラインの中で医師として活動することが是非必要であり、医師という専門職にこだわっているとうまくゆかない。

厚生行政(公衆衛生)に働く医師、男性一、七五一人、女性五六四人、30%強が女性であるが、厚生省関係一〇〇人の男性医師の中で女性は5%

とごく少ない。こうした分野にもっと女医さんが活躍して欲しい。

昭和22年に施行された保健所法が、昨年度地域保健法に改正され公衆衛生活動も地域保健として、新しい視点で推進されることになったが、心配していた保健所法施行令第四條の保健所長は医師でなくてはならないという条項が残されたことは大変うれしいことである。戦後日本の社会で、

公衆衛生活動が果たした功績は大きいと思うが、特にこの分野で女医が地域医療や保健所活動の中で地道にまじめに努めた成果を大いに評価したいと思う。

これからの若い女医さんたちも、もっとどしどし既成概念にとらわれず、新しい分野に挑戦して実力を発揮して欲しい。特に法律にもとづく施策や事業をやるとき、メデイカ

阪神大震災被災地の巡回診療

阪神大震災被災地の巡回診療

愛知支部 佐藤千代子

平成7年2月10、11、12日の三日間、日本女医学会では被災地の巡回診療を行いました。行動を開始するまで、私どもはあらゆる角度から救済医療活動の可能性について情報を集め検討いたしました。日本医師会の災害対策本部が大阪府医師会館に設置されると聞いて大阪にとびました。しかし、実際の行動計画はまだ確立されていなかったこと、やむなく直接神戸市役所衛生局へ、出動可能な避難所があれば連絡していただきたいと申し入れました。

2月に入り連絡があり、急拠医療活動に赴くことになりました。突然のことでしたので全国の会員のご希望を伺うことができず、義援金募集のご依頼を申しあげた時のアンケートにぜひ参加したいと申し込まれた会員の方々に連絡し、理事も加わり、日本女医学会医療救護班として会長以下一四名(三日間全日の方から一日の方も含め)が会員の車二台ともに出発しました。

9日夜から現地に入った私どもは翌朝から須磨保健所を拠点に、その指示に従い現地看護婦の案内で三班に分かれ、避難所約二十カ所を巡回診療いたしました。千人くらいの大規模な避難所には診療所が設置され医師が常駐していますので、私たちの廻ったところは一〇〇人〜五〇〇人くらいの小さな避難所でした。

参加会員の方からそれぞれの記録、感想を記していただきますので総括を述べますと、女性同士の気易さできめ細かな診療ができて患者さんの大変喜ばれたこと、眼科、耳鼻科の巡回診療が珍しく感謝されたこと、特に眼科医の持参された眼鏡に希望者が殺到されたことです。

私どもの宿泊は市役所からの指示で神戸港に停泊している一万七千トンのフェリーの客室で不安なく過ごすことができました。診療を終え、船に戻り、一室に集まってミーティングを行い明日の診療に備えました。今回出動が決定した後も次々と参加をお申し込みいただきましたが、

昭和40年代の医局生活は70年安保紛争のまっただ中、すべてを破壊し、新しい体制を構築するという「マルクーゼ」の理論が横行する時代であった。その厳しさの中、医療行政、教育制度、福祉、日常生活のすべてが政治そのものである事を痛感し、46年4月の統一地方選挙に挑戦。以来、目黒区議二期、東京都議二期、二十年余り地方議会で働かせていただいた。

この間、エイズと取り組み、日本で最初の本を出版し、同じ感染経路を持つB型肝炎ウイルスによる母子間感染を遮断する対策にも成功した。鹿教湯総合リハビリテーションセンターの整備や東京都医療技術短大の創設も完了し、今年7月完成予定の東京ウイメンズプラザでの、女性健康相談等も女医学会の仕事の一つにすべく努力している。



常任理事 松井ひろみ

政治・行政の立場から

初当選した時、区長に「医者として健康、福祉との連携のもと、包括的な推進が必要で国民の健康サービスの分野で、女医さんが能力を生かし活躍できる分野も多くなると思うので、後輩の女医さんのご健闘を祈ります。

被災地巡回診療に参加して

都下東支部 山崎倫子

フェリー宿泊の人員が限られていたためお断りしなければならなかったことを申しわけなく思っています。

実際に我が目で見た被害の大きさは声も出ないほどでした。なお止むを得ないといえあらゆる面で今もって指令系統が不確定な状況を見て、災害に対する医療の危機管理も平常のときからの準備が大切だと思えました。合掌して見送ってくださった患者さん、家族の方々に平穏な幸せが一日も早く訪れることを祈るばかりです。

2月10日午後4時過ぎ東京発、名古屋から佐藤会長、橋川先生他一名に合流し、まず新大阪、JRにて住吉へ、タクシーにて繋留中のフェリー「ニューしらゆり」に到着したのは

午後10時近く、薄暗い街中には墨々と崩壊した建造物、瓦礫、落下した高速道路、焼けただれた鉄骨が続く。僅か二秒たらずの瞬時にこれほどの破壊がと目を被うばかりであった。

ニューしらゆり宿泊者入口の立看板に沿って細い階段を降りるが、地面には液状化現象がおき、ざつくりと亀裂が走っている。人っこ一人見えない埠頭に不安と心細さでいっぱい。ようやく船体が見つかる。既に二、三日前から出張しておられた松井、白浜、稲生理理事らに迎えられる概要を聞く。

らの診療班がテントを張っていた。半壊した西市民病院の残った一棟は一杯の患者たちが診療を求めていた。従って私たちの巡回は医療班の手の届かない小さな取寄施設、憩の家、老人施設、朝鮮総連事務所、などであった。ここでは既に会社に出かけている人や自宅のようすをみにいたり品物を取りにいたりする人が多く、高齢な弱者、けが人たちが残っているばかりであった。引き続きフォローを要する新生児、火傷三度、不安症等を除いて私自身はよく話を聞く、慰め、励まし、簡単な処置交換と薬剤投与、生活指導くらいしかできなかった。

翌朝8時半集合、松井理事提供の六人乗りバン、岐阜からジープを自ら運転してこられた半田先生の一台と神戸市チャーターのタクシー一台に分乗して一行須磨保健所に集合する。保健所長、保健所スタッフに巡回する施設及び再診を要する患者などの指示を受け、地元西市民病院の看護婦のアテンドを受け、グループ別に訪問を開始。大震災後既に三週間もたっているの当初の報道のような混乱はなく、まだ一部ライフラインを断たれているとはいえず、目を被う状況からは脱しておられ、食糧もゆき届き、自らの力で、またボランティア団体のすばらしい活動で温いものも補給されつつあり、問題のトイレも入浴も被災者すべてにはあたらぬものの改善されつつあるようだった。

さて実際の活動については、前記した通り三週間を経て神戸市内、県内の病院、診療所もフルに医療活動を再開しており、全国各地、都市及び医大、病院等の診療グループが救援に来ており、須磨保健所の二階市役所また役所前広場にも数カ所か



須磨保健所前にて



宿舎となったフェリー「ニューしらゆり号」前にて

阪神大震災救援活動

中野支部 白浜光子

急な出勤ではあったが、連絡もスムーズに行われ、東京における医薬品の準備及びその輸送、また現地の受け皿についても日赤活動のあとを継いですべて円滑に行われ、短期間ではあったが、避難所の被災者の方たちに対する医療活動の実を挙げると共に女医としてのいろいろな悩みなどの相談にも乗ることができた。全国から義援金を寄せていただいた会員諸先生に篤い感謝を込めて報告を綴る次第である。

佐藤会長は松井常任理事と共に現地の神戸市衛生局等と接衝を重ね、医療救援活動の実現に奔走された。山崎名誉会長も(ご主宰のデイケアセンターにダイヤナ妃が訪問された直後にもかかわらず)早速参加され、佐藤会長とともに活動された。また、松井常任理事は東京から運転手つきのワゴン車に医薬品を満載して来神され、岐阜の半田会員はジープを駆って参加され、きわめて困難な神戸の交通事情の中何よりの戦力になって頂いたことを特記したい。応募して参加された各地からの会員は若い方が多く、元氣潑刺バイタリティに溢れ大いに活躍して下さいました。日本女医学会の若い力を非常にたの

コースを巡回。倒壊により運営不能となった西市民病院の看護婦が二、三人ずつ同行し、診療活動がスムーズにはかどる。医薬品は日本女医学会持参のものほか、須磨保健所備えつけ(救援品)のものも携帯。

1班 永谷(福井)、坂本(福岡)両先生は、瓦礫の山の間に縫って徒歩で巡回。東落合小、竜ヶ台小、JRたかとり工場、コスモス、平田幼稚園。

2班 山崎(長野)松風南地域センター。遠方のため保健所提供タクシーにて。

3班 稲生、松井、白浜 須磨文化会館、環境局須磨事務所、外浜老人いこいの家、うづしお、朝鮮総連、ワゴン車分乗。午後、前記避難所に加え、水族園、地域福祉センター、納税協会等。半田(岐阜)、宮原理事(群馬)参加。

夜、フェリーロビーにてミーティング開催。10時すぎ山崎名誉会長、佐藤会長、橋川常任理事及びボランティア一人到着。

02月11日 全員朝、須磨保健所集合。大体昨日と同じコースをそれぞれの班に別れ、巡回開始。

1班 昨日と同じく永谷、坂本両先生徒歩にてコスモス、風雨等。

2班 山崎、半田両先生、ジープにて巡回。

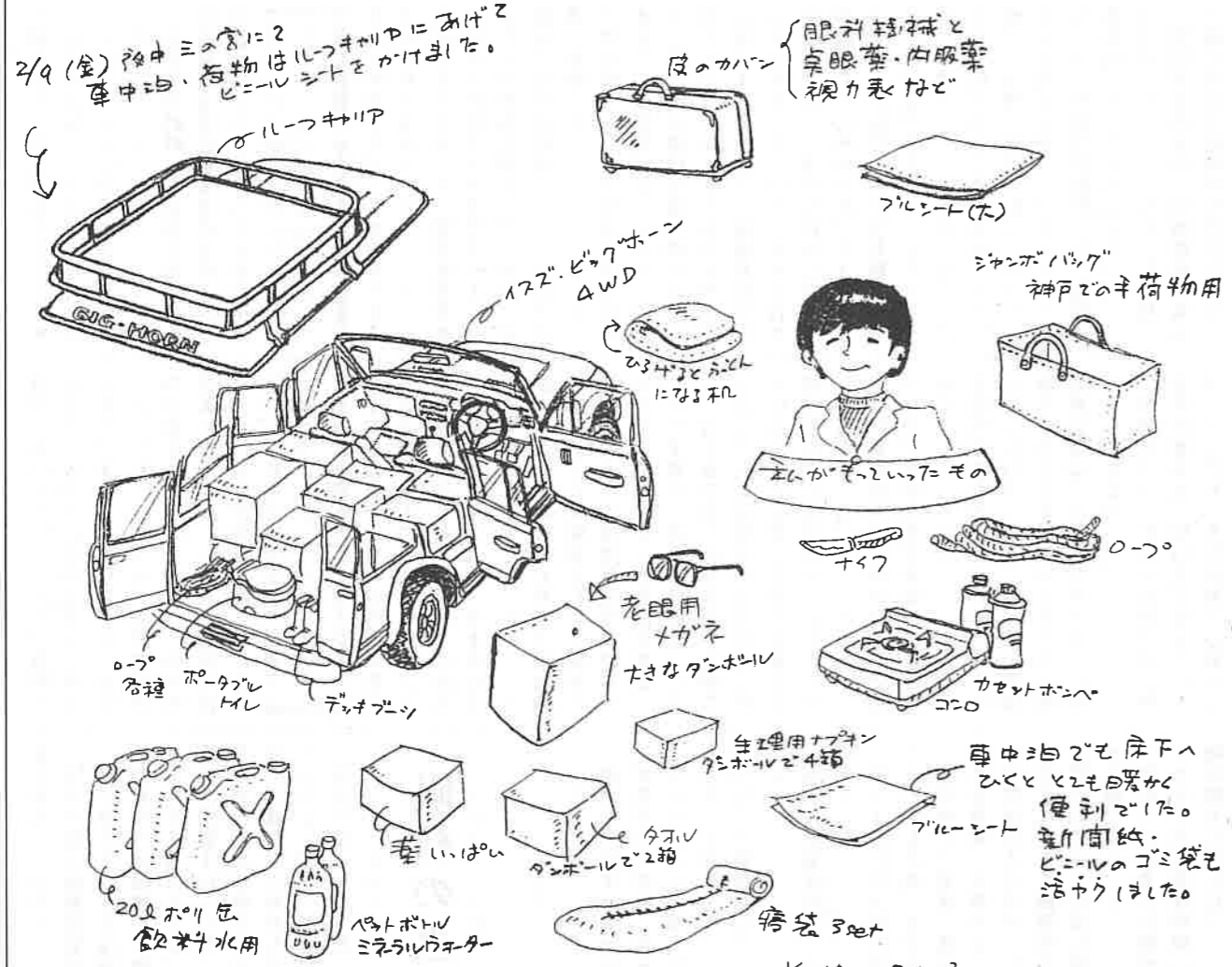
3班 山崎、佐藤、稲生、松井、ワゴン車にて。

神戸での経験

岐阜支部 半田喜久美

女医会から神戸行き募集があった時には、従業員全員の希望があり、嬉しくたのもしく思え、それだけでも充分私にとって良い収穫だったのですが、実際に行ってみて先輩方の診療のかたわらに居られたことは何よりも良い勉強になりました。医師ということば以外に女医ということばがあるのはけっして差別語ではなく、医師+αであると気づきました。また、先輩方のパワーに触れたら、四十半は過ぎたらどうも疲れやすくなったと思っていた自分が甘く思えてきました。

女医会から神戸行きの募集があった時には、従業員全員の希望があり、嬉しくたのもしく思え、それだけでも充分私にとって良い収穫だったのですが、実際に行ってみて先輩方の診療のかたわらに居られたことは何よりも良い勉強になりました。医師ということば以外に女医ということばがあるのはけっして差別語ではなく、医師+αであると気づきました。また、先輩方のパワーに触れたら、四十半は過ぎたらどうも疲れやすくなったと思っていた自分が甘く思えてきました。



阪神大震災(ボランティア) 参加者 → 神戸 須磨眼科病院 半田喜久美

神戸救護班に参加して

神奈川支部 稲生 裏

平成7年2月10、11、12日の日本女医会神戸救護活動のノロシは上り待ってましたとばかりに地方の潑刺とした会員の方々が応募され、大活躍された。本日にタイミングもよく、受皿もちゃんとしくまれており、出来だっと思う。私のような者が出る幕ではなかったのだが、あいにく11、12日の連休には応募者が多々ありのようだったが、10日の朝8時現地集合には9日に到着していな

高血圧、インフルエンザ、喘息、気管支炎、下痢、胃炎、めまい、不眠、自律神経失調症、やけど、創傷、視力障害、難聴等。

〈参加者〉
山崎倫子(東京)、佐藤千代子(名古屋)、白浜光子(東京)、稲生裏(神奈川)、橋川ふさ子(名古屋)、松井ひろみ(東京)、川田喜代子(大阪)、加藤信子(福岡)、宮原茂子(群馬)、山喜美枝(長野)、永谷裕子(福井)、坂本雅子(福岡)、半田喜久美(岐阜)、山本辰子(大阪)。

た家々をつぶさに説明してくれ、テレビでのみ知ったことも目をのあたりし、いかにひどかったかがよく分った。

中央区加納町にある神戸市役所衛生局健康増進課事務係の方の案内で会議室のような所に行く(市役所は十階以上の立派な建物でエレベーターも六階くらいまで通っている)。

先着の長野の畑山先生や福井の永谷先生と挨拶を交し、名刺交換をする。そのうちに富山からまわってこられた松井先生と東京から別途松井先生おつかえの助手つきドライバー(た

明日のスケジュールをきき、ひとまずここは引揚げて、フェリーに行き、宿泊する事になる。神戸はじめてというのに、このドライバーさん大変土地勘がよく、地図を見ながら一度きりだけでトントン行きついてしまふ。10日も11日も全くその通りで実に助かった。フェリーは「ニューしらゆり」という名称で、全長一八四・五メートル、一七、三九三トン、速力二二・六ノット、九三二名定員、62年進水の新日本海フェリー(株)、小樽へ就航の船らしかった。

水は大阪から運んでいるとか、入浴もでき、不自由はなかった。消防と救護班へのサービスであった(二月末までのサービスであった模様)。翌10日午前9時、須磨保健所集合、三班に分れて避難所めぐりをした。

昼間はおつとめに行ったり、登校したりで、残っているのは老人と病人ばかり、火傷の手当をしたり、血圧を計ったり、インフルエンザ様患者の診察をして投薬をする。下剤や頭痛薬、胃ぐすり、いたみどめ等が役立つ。重症患者は入院させてもらえませんが、軽症の中途半端の患者さんが困っていたようである。

お昼に須磨保健所に帰ってみると、岐阜の多治見市から半田先生が夜をたたくたの荷物をつんだジープでやってこられていた。この付近を三時間もグルグル回ってようやくたどりついたとのこと。少しここで眠ったからとお疲れも見せず午後避難所めぐりに参加された。検眼の上で眼鏡をその場で渡して上げるので大変に喜ばれた。水族園に避難していた老婆は、週刊誌は眼鏡なしでよく見えるが遠くは見えないとのこと。それは近視なのですかからこの次にはちゃんと計って遠くも見える眼鏡を持参します」と、いったらとても喜んでた。

この水族園も後日のニュースで知ったが、電気と水が来なくて半分は死んでしまったとのこと、これをきき全国からお魚を送りたいといってきたくれたそうだが、近くの公園は取りこわした家屋のガレキの山で水族園どころではないとのこと、いつのことになるか……。

夜10時すぎ、前会長山崎先生、現会長佐藤先生、橋川先生ならびにボランティアお一人が到着。心強いことである。11日9時、須磨保健所に集まり、三班に分れて昨日とは別の所へ行く。避難所では眼鏡や点眼薬その他の投薬も大変喜ばれたが、何としても義歯が要望されていた。配られる食事がかたいで歯がしつかりしていなくては胃腸もおかしくなってくるというので、一日も早く歯科医のご協力が望ましいと思った。

眼科の立場から

愛知支部 橋川ふさ子

意外なことに眼科と耳鼻科の診療が喜ばれましたので、翌日からは、眼科医二名、耳鼻科医一名、看護婦一名が組になって、避難所の大小を問わず巡回しました。岐阜から参加されました半田先生が三〇〇個ほどのメガネを持って行かれたので、その処方活動が始まりました。疲れ目とか白内障の点眼水が欲しい方とか、メガネがほしい方が列を作って待たれる程の盛況でした。廊下の片隅で簡単な検査だけで、急場しのぎのメガネながら、最高の視力の出るのを選んで差上げました。

こんなメガネを喜んでいただけると、早く知っていたらよかった。半田先生と大変残念に思いました。長時間順番をお待ちになった末、その方に合ったメガネの持ち合わせが無くておことわりする時は、本当につらい気持ちでした。是非もう一度、メガネをたくさん持って行って、大勢の方々に喜んでいただきたいと決心して帰ってきました。幸いにも名古屋眼鏡組合から、必要数のメガネを協賛したいという申し出がありましたのでうれしく思っています。

今後どうするかとか、政府は急いで指針と見通しを示し、一日も早く対応して、希望を与えていただきたいと願っています。

期的にもよかったのかも知れない。どこまで踏み込んでいいのか、もつと積極的にやるべきではないかという葛藤の中で、「女医さんです」「女医さんでいいね」「私たちのこと忘れないうで、また、来てくれる」「いつ来てくれるの」という言葉に、むしろ励まされ、必ずもう一度来なければならぬことを痛感した。

目黒支部 松井ひろみ

1月17日、想像を絶する大惨事が起きた。四日後、緊急常任理事会が開催され、佐藤会長から各方面の情報が報告された。女医会として、何かしなければならぬという使命感にあふれる反面、月末からの保険請求の事、患者をかかえる医師が医療活動に出られるかといった心配が錯綜する中で、厚生省、日赤、神戸市役所等と連絡をとる。翌週、神戸市衛生局から医療活動の要請があった。

10日頃なら可能という会長の決断と数人の先生方から参加できるといふ回答により、即、要請を受けることが決定された。私も北陸、山陰の講演を終えて、

哀悼 稲葉幸子先生

元日本女医学会理事 稲葉幸子先生(昭和23年東邦大学医学部卒)には、去る2月21日肺炎にて、ご他界になられました。23日お通夜、24日告別式(共にご自宅(横浜市瀬谷区)がしめやかに)と行われました。稲葉先生は昭和45年から理事二期、

社団法人 日本女医会

ボランティア活動に参加して

大阪第2支部 川田喜代子

佐藤会長のお伴で、大阪府医師会へボランティア活動の参加を申し入れた際に、①こちらの指定の日時に出勤すること。②午後9時から翌々日の午前9時までの二泊三日を一単位とする。③宿舎は確保できないので寝袋持参。④食事も自分の分は持参。⑤医薬品もできれば持参。

等々の大変きびしい条件を呈示され、女医会としてはすぐに参加しにくい現状と思われるのに、2月10、11、12日の三日間、ボランティア活動することに決定。役員有志のものに参加してほしいとの事務局からの電話をいただいたとき

また来てくださいな

神戸市衛生局に入り、10日から須磨保健所管内の巡回診療を開始した。佐藤会長、山崎前会長を中心に日本女医学会の医療チームは、エネルギーを絞り、すばらしいグループだと思つた。数日にもかかわらず、健康面ばかりでなく、崩壊した家のこと、ローンのおむつの交換、避難所のリーダーとしての苦悩など、突然ストップした日常生活のあらゆる点について相談を受けるようになった。

午前7時45分、神戸市役所前に到着、市役所にもかなりの数の被災者が宿泊されている様子で、ぐるぐる廻つてもどこが入口かさっぱり判らず、やむを得ず市役所衛生局の方と携帯電話で連絡をとって、女医学会の先発隊の先生方が宿泊中の三の宮ポーターミナルに停泊中のフェリー「ニューしらゆり」を教えていただく。港の方へ行くに従って、道路の液状化がはつきりとみられ、自然の脅威の大きさに今さらながら慄然とする。

が収容されている中学校へ到着、狭い保健室で常駐の内科の先生の横で早速診療にかかる。耳鼻科の場合、必要不可欠の光源がうまくいかず、看護婦さんの協力を得てやっと何人か診察をすませたところへ各教室を巡回された橋川先生方が帰ってこられた。こちらの大体同様の規模で約一、〇〇〇人、ちょうど昼食時で校庭では大きなお鍋での炊き出しがおこなわれていた。先程より少し大きい目の場所が救護所で、電話で前もって連絡されていたせいか、かなりの人数の方が待っておられ、特に眼科は、眼鏡を無料で進呈との情報を聞きつけ五〇名以上の列ができた。一旦保健所へもどり、早くすませて待っていただいていた内科系の先生方と合流してやっと昼食をとった。眼科、耳鼻科等の特殊外来は今月初めて、保健所側としては九カ所くらいを予定されているようであったが、時間的に到底無理とあと二カ所だけ廻ることとする。

第三の避難所は収容人員が多いよう、各教室をはじめ廊下にも、色とりどりのふとんが足の踏み場もないくらいに敷きつめられ、全くとりかかっている。また、帰りぎわに通りかかった玄関のコンクリートの一隅では、高さ約五〇cmほどのダンボールで囲いをして、そこに三世帯ぐらゐが一塊となり、中年の女の人に抱かれた三匹のマルチーズがキョトンとこちらをみている。聞くところによると、この五〇cmの囲いは精神的に非常に意味があるとか。第四避難所ではかなり参っている人をみつけた。1月17日の震災の日より約一カ月、ほんとに無理もないと同情を禁じ得ない。

「耳鳴りがする」、「めまいを覚える」、「聞こえにくい」などの訴えで診察してみても病的な所見は見当らないといったケースがほとんどで、何と助言をしたらいいものか。空しい思いが先行する。持参したテルネリン、メリスロン、メチクール、それに安定剤等を渡して、「耳そのものに異常はありませんよ。地震のショックが余りにも大きかったからおこってきた症状のようです。この薬を飲んでしばらく様子を見て下さい。その内にきつと落ちていくと思いますから」と話すと大方の人たちは少し明るい顔になってくださる。しかし、親子づれで診察した四十歳後半の父親は、「この地震で何もかも全部失くしてしまっただけでどうしたらいいのかわからない、生きていくのがいやになった」と訴えられたので、「こんなかわいい女の子があなたを頼りにしておられるのに、そんな弱い気持ちでどうするのですかお父さん。がんばってくださいよ」と思わず叱るような大きな声でいってしまっただけで、「がんばれ」という言葉は禁句だと思いつつも、

あたりがすっかり暗くなったので時計をみると7時すぎ、外は本降り雨となっていた。テント生活の人たちは？ 暗い思いが頭をよぎる。そして、皆の善意もさることながらやはり行政がもっと強力に動いてほしいと願わずにはいられない。また、ほんとに短時間ではあったが今回のボランティア活動に参加して、「百聞は一見に如かず」の言葉どおり、いろいろな状況を目のあたりにして、自分の無力さを感じると同時に、人はいかに環境におかれても耐える力があるのだなと希望に似た思いを持つ

連日のテレビに映し出される阪神大震災の痛ましいように、少しでも役にたてたらという思いで、折からの11、12日の連休を利用して女医会の救護活動に加えていただいた。ズボンにジャンパー姿でリュックを背負い、マスクに軍手、スニーカーといういで立ちで、博多駅から新幹線に乗り込み姫路駅まで。あとは折り返しの電車に乗り継ぎ乗り継ぎ、阪神三の宮に着き、地図をたよりに宿泊予定のポートターミナルに停泊中のフェリー「ニューしらゆり号」を目指して、ドコトコ歩いた。途中、かたむいたビルや崩壊した家屋、高く積まれたガレキの山、あちこちにロープが張られ「危険」の紙が見られる。想像以上の光景に心の重い

義援金ありがとうございます。

3月20日現在九、九一一、〇〇〇円集まりました。詳細および用途につきましては、次号でお知らせいたします。

貴重な体験、大きな教訓

福岡支部 加藤 竺子

つことができたのも事実である。このような大へん貴重な体験をする機会を与えてくださった佐藤会長をはじめ松井理事、その他の皆様に心から感謝しております。

集合。和氣所長にお会いし、いろいろと苦勞の様子を伺う。職員の方たちは本当に疲勞困憊の様子だったが、それにもめげず一生懸命に頑張っておられた。西市民病院が被災のために手伝いに派遣されたという二人の看護婦さんの案内で二班に分かれて巡回診療に行く。避難所で毛布にくるまりながらうろろに物思いにふけっている老人や、やけどの診療に無表情で耐える老人、どの人も何かまだ現実をどうとらえているのか分からないような感じだったが、話しかけ、引き出すことで、ぼつぼつと身体の不調などを話します。日赤の診療班が一通り対応済みのケースが多く、カウセリングのようなケースがほとんどで、その他不眠や血圧や風邪症状の訴えに終始した。帰りに和氣保健所長とお話ししながら、子期しない大災害時の対応の難しさ、ご苦勞を聞きながら、行政の立場として、医師として、住民として、いざというときの緊急対応の問題はこの大きな教訓をもとに、もっと真剣に取り組まねばと痛感した。本当に貴重な体験をさせていただき感謝いたします。現地の方々の一日も早い立ち直りを心からお祈り申しあげます。

医療支援に参加して

福井支部 永谷 裕子

神戸は、どんな状態になっているのだろう。新聞やテレビで見ているだけでは全体がわからない。やはり現場に行き体験せずにはおれないという気持ちで、女医会の支援に参加した。専門も年齢もさまざまな女医たちが、神戸の方々のために役立ちたいという目的で、日本各地より集まった。

2月9日、JR、代行バスと乗りついで、神戸市役所新館へたどり着く。一、二階は避難所になっている。

壁には安否を問う張り紙がビッシリ。衛生局の小田さんより医療状況を聞くが、完全には把握できないまま、その夜はフェリーに宿泊する。同室された先生方との交流は、楽しい時間、気持ちを取りフレッシュさせられるし、心も充実させられる時間だ。翌日、須磨保健所へと向かう。途中、長田区の焼け跡は、まるで爆撃の跡と同じだと、ある先生はおっしゃった。私は、ただ啞然と見ているしかなかった。こんなにひどいとは

阪神大震災

神奈川支部 中濱 昌子

電気が水も絶たれし 被災者らは
乏しき食も 頷ち耐へをり
父母を 失ひし児は 折に見す
雪空よりも 暗き眼差し
助け呼ぶ 娘の声 耳を離れぬと
火の海くぐりし 人の嘆きは
復興に 立上らむとす 被災者ら
肉親失くせし 悲しみ越えて
被災者ら 避難所の生活も 限界か
栄養失調続出すとぞ

早く、自分たちの手で

福岡支部 坂本 雅子

阪神大震災の直後から、何らかの医療救護活動に参加したいと思いが、日々過ぎていた矢先に女医会からのお誘い、随分永い間臨床の第一線から離れていますのに、現場でお役に立てるかどうかもかえりみず、さっそく参加させてもらいました。

新幹線の姫路駅から、在来線に乗り換えて、少しづつうづらうづらつたのですが、神戸駅に近づくとつれ

れにみる大規模のため、日本人にボランティアを实践させる、またとな機会だと思ふ。しかし官僚主義のためか、受け入れにストップのかかる場合があり、女医会の場合も決定するまでに少し遅れた。個人で活動に参加したいと思つて市役所に行つてもできない場合もあるという。あるスウェーデン人の女性は、貯金を使い、仕事は一日おきに休んでボランティアのための休暇が認められ、困ったときにはすぐに手をさしのべられる、そんな社会を築く第一歩かもしれない。実際に築いていかねばならない。

今回の医療支援にも、ぜひ参加したいと思つている。

第一日目に、まず、神戸市役所で私たちがのオリエンテーションを聞いたときには、もつと行政の方々が、現在の医療の状況や問題点、それを解決する医療資源、施設やマンパワーの状況、そんな中で医療救護活動のために来ている私たちにしてほしいこと等をはつきりと説明してほしい、そしてそれなりの役割を果して帰りたいと思ひました。しかし、二日目にはすでに、どうもこの人知をこえた災害に見舞われたこの街では、今までの私たちの価値や時間の感覚で、ものを考えたり、いわんや要求したりしてはいけないうえ、この巨大都市はまるで傷つて倒れたおきな象のようなもの、始めに書いたように、一歩足を踏み入れると、その傷の大きさと深さに息をのみ、さらにそのつきには、自分の見ているものはその大きな象のシッポの一部にしか過ぎないのではないかと

平成6年度 日本女医学会会員学位取得者一覧表

(学術部) 平成6年12月10日

全国医科大学80校に調査依頼し57校より回答あり結果360名の学位取得者中11名の既会員がおり、会員外で住所判明の320名に入会のお誘いをし3名の入会あり。(※印は平成4年度学位取得者)

(敬称略)

Table with columns: 支部, 氏名, 出身校, 卒年, 論文名. Lists 11 members and their research topics.

高崎市で公開講演会

群馬支部 丸茂 晶子

平成7年2月18日、群馬県高崎市医療センターにおいて、日本女医学会主催の公開講演会が行われました。

高崎は昨年からエイズ教育推進地域として指定されていたため、教育委員会関係、学校の保健指導関係の方やエイズに大変熱心に取り組んでいる人たちがほとんど席が満たされていきました。

〈席席よりお願い〉

近日、各支部長宛に左記の件につき依頼状を送りましたので、ご協力をお願いいたします。

うことにも気づかされるのです。それに、ボランティアというものは、たとえ見えているのが象のシッポであって、そこで自分の役割は見つけていかなければいけなかったのだとも思います。

象のシッポとお断りして、あえて感想を述べさせていたく、とすれば、私たちの巡回した避難所の状況から推察されたことは、たしかに、昼間はおとしより以外、後片付け、役所の手続き等、もう次の生活へ一歩を踏みだしておられます。猛威をふるっていた風邪もや下火、慢性疾患の人もやと診療を始めた地元のかかりつけ医の治療を受けることができるようになっていきました。

急性期の医療の時期は、もう終わって、むしろ、避難所のなかでだけを見て、身体への医療よりもカウンセリング、避難所生活が日常化している中で生活指導、作業療法など、人間関係がないと支援できない、しかも保健・医療・福祉のチームでの継続的な支援が必要な時期になっているような気がしました。

女医学会救護班に参加して

長野支部 畑山 喜美枝

阪神大震災の関連の先生方には心からお見舞い申し上げます。その日からの刻々と明らかになる災害ニュースに、何かのお役に立ちたいと矢も盾もたまず日女医の呼びかけに、早速、登録させていただきました。

院の看護婦さんとともに三班に手分けして、被害の少なかった高台の須磨ニュータウンへ、小人数ずつ移動収容された方々の避難所を、巡回診療いたしました。昼間でしたので、ほとんどがお年寄りでした。

震災後「ばばが、『とまんかい』と、いうても、『とまれん』と、いいましたので、紹介状を書こうとしましたら、『診療所の先生とも焼けてしまつて』といったありさまでした。ある小学校の避難所では、呆けてしまったおばあちゃんを診てもらいたいといわれたのですが、その方が見当たらず、もしかしたら自宅にいるかもと、出かけて診察した所、重症の肺炎で入院の手続きをとりました。今ごろどうしておられるか心配です。

第二次救援活動に参加して

愛知支部 橋川 ふさ子

先回の救援活動の際、思いがけず眼鏡が大変に喜ばれましたので、再度眼鏡を持って行きたいと思っておりましたところ、眼鏡組合の協賛を得て、一〇〇個ほどの提供を受けましたので、今回は眼科を中心に救護班を作り、眼鏡を持って避難所を巡回しました。

このたびは震災後約二カ月経過して、おりましたので被災の生々しさは薄れておりましたが瓦礫の山は相変わらずでした。まだ一〇万人近くの避難所生活の方がいられて不自由な暮らしをしておられて心が痛みました。

ガネは本当に行き届いた心配りと感服いたしました。夜はフェリーに戻って、反省会。こんなことがなければ、お会いすることもなかった尊敬する先輩の方々と共感できる活動の場を持つことができ、人生の曲がり角を曲がったような興奮を覚えました。

理事会議事録

日時 平成7年1月28日(出)

午後1時30分

場所 京王プラザホテル

出席者

- 佐藤、白浜、中濱、野澤、青井、
- 稲生、栗原、佐々木、野本、橋本、
- 橋川、平敷、松井、丸茂、大坪、
- 加藤、川田、佐伯、鹿田、清水、
- 田中、久田、宮原、村田、山本、
- 吉崎、野呂、藤岡、山崎名誉会長

欠席者

- 石原、佐野、大澤、西嶋、松本、
- 南雲 (以上6名)

理事会開始に先立ち東京女子医大
地域保健研究会に助成金として二〇
万円を授与す。

議事検討事項

- 一、庶務報告 久田理事
- 別紙どおり報告、承認される。
- 二、会計報告 青井常任理事
- 平成6年12月分収支別紙どおり報
告、承認される。
- 三、各部報告

【学術部】

橋本常任理事
・本で行われるワークショップにつ
いて——申し込み者一二二名、う
ち、会員外一七名学生約一五名。
・平成7年度第1回ワークショップ
について——6月17日(出)か24日(出)
に福岡で開催予定。

【広報部】

稲生常任理事
・第一四一号会誌の校正会議は1月

19日に開催、来週半ばに発送予定。
・「日本女医学会誌 追補」を新理事に
購入を勧誘。

【渉外部】

野本常任理事
・一九九五年北京での第4回世界女
性会議について——参加希望者は
個々に国連NGO本部に登録する。
三〇余りのテーマでどの分科会に
所属するか女医学会も早急に決めな
くてはならない。

【事業部】

・公開講演会、2月18日(出)高崎にて
開催予定。
・ガン保険の広告、女医学会と共に
全会員に発送予定。
・「いきいき」への出筆依頼。

【National Coordinatorからの報告】

・MWIA西太平洋地域会長 Dr.
Dizon より関西大震災に対する見
舞状あり。
・ハーグでの国際女医学会開催中に
MWIA会長の選挙があるので、
それまでに日本女医学会としての意
向をまとめる。(投票権は二五名
分)

【会長報告】

・各支部長への「年頭所感」は回答が
二六通あり、女医学会誌に掲載した。
・「公開講演会等引きうけて良い」と
の回答は六通あった。

議題

一、平成7年度事業計画案および予
算案について——次の常任理事会
まで各部計画案および予算案を提
出すること。
二、吉岡弥生賞審査委員会、荻野吟

子賞選考委員会、学術研究助成金
選考委員会の開催日について——
2月25日(出)午後2時より開催に決
定。

三、総会について——埼玉県支部総
会の役員会を行なうため、決定事
項は後日連絡する。
四、国際女医学会について——岩平
佳子先生(大田支部)がヤングフォ
ラムに演題を提出。

五、阪神大震災について

・1月21日の緊急常任理事会での討
議事項 ①一般被災者に対しての
見舞金(25日説新聞に持参) ②
兵庫会員に対してはどのようにす
るか ③救援医療活動をどうする
か)の説明があった。
・これまで把握した他の機関の医療
活動、現地での医療状況等の説明
後、これから女医学会として医療活
動を行うか否か討議した結果、ゼ
ひ女医学会として活動したいとい
う意見が多かったため、できるだけ
多くの情報を得、早めに活動でき
るよう準備することに決定。

六、その他

・6月のワークショップの日には
講師の先生のご都合で決める。
・向井千秋さんの講演研修会を3月
初め申請する予定。
・向井千秋さんを国際女医学会の名譽
会員に推薦してはとの意見があっ
た。

副会長(庶務部担当) 白浜
以上
鹿田、久田、村田

会員動静

新卒入会(敬称略)

- 都下東支部 矢崎智子
- 神奈川支部 相澤史恵
- 入会会員(敬称略)
- 埼玉支部 谷内方子
- 新宿支部 橋本テル子
- 東女学内支部 新井桂子
- 川上順子、渡辺弘美
- 岐阜支部 清島眞理子
- 大阪第7支部 中川光子

集記

1月17日早朝に起こった未曾有の
阪神大震災は誰しも心痛の限りであ
った。五五〇〇の死者を出し、多数
の負傷者、家屋の倒壊など思っても
見なかつた大災害だった。
私どもの仲間の医療機関も壊滅状
態で九人の医師が亡くなっておられ
た。いたましいことと思う。ライフ
ラインがままならぬため未だに復旧
には程遠い由、全国各地から医療救
護班が参加し救護所を構えたり、避
難所巡回をして活躍しているが一日
も早い復旧を切に切に祈り上げる。
今冬はインフルエンザも猛威をふる
い各医療機関はてんでこまいのよ
うであったが3月も半ばを過ぎ、よ
うやく下火となった。また近くは3
月20日早朝に地下鉄サリン事件が起

福岡支部 熊谷尚子
退会者 一五名
物故者(敬称略)

- 渋谷支部 小林和江、諸岡妙子
- 東女学内支部 佐藤イコヨ
- 神奈川支部 木田信子、高田ミヨ
- 米沢文字
- 兵庫支部 出浦トモ
- 高知支部 中平千枝子
- 評議員(敬称略)
- 石川支部 木田順子
- 岡山支部 赤木瑩子

こり、国内はおろか国外にまで伝わ
り恐怖におどしいれた。徹底した捜
査を行い人々を安心させて欲しい。
さて会誌第一四二号にはワークシ
ョップ—女医の未来像—が六名の女
医の方々によって報告されている。
若い方々に大変参考になると思
う。最後に阪神大震災救護活動に参加
できたことは大変よかったことと思
う。(稲生)

平成7年4月20日 印刷
平成7年4月25日 発行
編集人 稲生 襄
発行人 日本女医学会
発行所 東京都渋谷区渋谷2-
8-7 青山宮野ビル
社団法人 日本女医学会
☎三九九八-〇五七一
FAX三九九八-一八七六九
東京都文京区水道1-
5-16
株式会社 金剛出版